# 校友時報

平成2年7月21日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塙2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 ㈱大勝堂印刷

# 「満足できた」が53％

## 第31回能高祭をふりかえる

第三十一回能高祭は、七月七、八両日を公開日として、盛大に催された。執行部の行ったアンケートでも「満足できた」という答えが半数を越えたが、来客からは必ずしも好評とばかりは言えない声も聞かれた。能高祭のあり方を探る時期か？

（二面に関連記事）

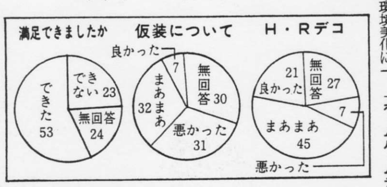
## 本校の独自性望む声も

### 記者討論

新聞部の取材をもとに、部内で話し合ったことをまとめてみる。

今年の能高祭に新しく企画されたのは**「ゴミ箱コンクール」**であった。一Dが優勝したこの企画には各クラスの独自性が発揮され、先生方も積極的に審査に加わってくださった。能高生の環境美化に対する意識が反映され、ユーモアも感じられる好企画として人気を集めたようだ。

今年もバンド演奏に人気集中



**「ホームルームデコ」**と**「のど自慢」**は、出場者は楽しんでいる様子だが、父兄や他校生、子供などの外来者には、やや不満という声も聞かれた。

「あまり見るものがない」という能高祭全体への感想ともあわせて、今後は外来者への対応方法を検討する必要がある。

**「仮装」**については、校内の生徒からも「品がない」とか「ドタバタしすぎる」などの意見があり、先生方の中には、「仮装ではなくてコント大会だ」「新機軸をうち出す時期ではないか」というアドバイスをしてくださる先生もいた。

**「壁新聞」**は例年どおり三年生の作品が上位を占めた。「作品としての完成度は三年生が群を抜いたが、内容はやや型にはまる傾向が見られた。一年生ののびのびとした発言、二年生の丁寧な作り方などは、大いに評価できる」と講評をした越後先生は語っていた。

**「各部展示」**は、もう一息の感があった。閉会式で大高育也実行委員長は「文化祭」という言葉を使ったが、文化部に限らず運動部も小規模でもよいから、日頃の活動の一端を公開すれば、部員拡大のきっかけにもなるのではないだろうか。新聞、図書、文芸、書道、JRC、歴史など、他校では例年展示をしているという学校もある。

また、山岳部が登山用具を展示したりテントを張ってみせたり、柔道、剣道などの部が型を披露したりというようなことは、それほど過重な負担なしに可能ではないか。

時間的余裕のない本校ではあるが、意外に期間中ヒマな人もいるという現実を踏まえ、今後は各企画や部門の分担をより徹底させるように、実行委員会、生徒会執行部による今年度の反省を、きちんとしてほしい。そして来年度はよりよい能高祭を目ざそう。

---

### あすから夏休み

夏休みはあすから、八月二十日まで。補習などもあり忙しいが、健康づくりにも気を入れて、有意義にすごそう。「夏を征するものは……」という。後で悔やむまいゾ!!

---

**論説**

## 公共心の復活を

### 能高生の自覚を望む

最近の能高生は……こんな言葉を耳にすることが多くなった。確かに最近は能高生の行動が学校の内外で話題になっている。遅刻、盗難、喫煙、無断外出、ジュース・パンのカラの投げすて、そうじのいいかげんさ、あいさつの不徹底、男子の短いシャツ、女子の髪型や服装のセンス、男女とも制服に不釣合な派手な色のソックス。

校外では交通マナーの悪さ、電車・バスの利用態度。そして、自転車の放置、無施錠……。

なぜ、最近になってこのようなことが起こるようになったのだろうか。その原因は大きくわけて三つあるだろう。

まず一つは能高生に対する周囲の信頼を誤解して、自惚れているからだろう。能代市民のほとんどが能高生は人間ができていると思っている。しかし、能高生自身はそのような思いに応えようとしない、つまり能高生としての自覚が足りないことが一つの理由であろう。能高生は大きな勘違いをしているようだ。

二つ目は能高生には公共心や協調性が不足していることがあげられる。我々は「学校」という集団の中で生活している。その中で、「自分一人くらいはかまわないだろう」という考えを持ってしまっているのである。そのような人間が増えるとその集団は目茶苦茶になってしまう。能代高校は今まさにその状態に進む危険をはらんでいるのではないのか。

一年のあるクラスで能高祭の片付けのあと、その日欠席していた生徒の机・椅子を誰も運んでやらないのを見て、担任が大声で叱ったという話を聞いた。それだけ能高生は集団での生活の仕方を理解できていないのだろう。「オレは知らない」という能高生は珍らしくない。

最後は能高生には点採り虫が多数いるということである。能代高校は進学校であるから、当然大学を狙っている人がほとんどだ。その夢を実現させるために毎日の勉強はがんばっていても、普段の生活がしっかりしていないので、人間としてあたりまえの生活ができない人間が生み出されてしまうのである。テストは百点だが、朝のあいさつができない、呼ばれても返事もしない——このような人間が社会に出て、人々に信頼され人々をリードして、暮らしていくことは難しいだろう。

能高生の全員がこれにあてはまるとは思わないが、心当たりがある人も少なからずいるのではないだろうか。

能高生は将来、リーダー的な立場に立つ人がほとんどである。だからこそ自分の好みや打算で行動するのではなく、集団の中で協調して生活し、公共心を身につけることが、点数を取ることよりも大切なのではないだろうか。

能高生はやれば出来るのである。

---

## 特別委員会が発足

### 無関心への対応がカギ

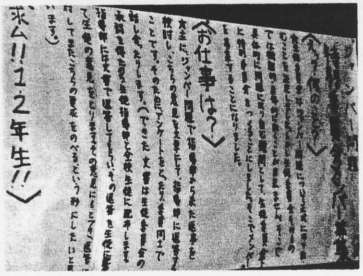
**ジャンパー問題**

四月の生徒総会で、生徒会長の発案により発足が決まった「ジャンパー問題特別委員会」は、その後掲示板にこれまでの経緯と、委員会委員を募る広告が出された。しかし応募者は三年生のみの五人であったことや、能高祭があったためまだ目立った活動はしていない。

我が校の生徒心得には「ジャンパー着用禁止」という項目がある。三年ほど前から生徒間にこれに対する反対意見が高まり、波紋を広げてきた。

この問題は前池端会長が二年の時にクラスで話題に上り生徒会で取り上げられたことに端を発し、当初かなり大きな盛り上がりを見せたが、生徒指導部の許可は下りないままになっている。ことがジャンパーであるため季節ごとに波があり、騒がれる季節が冬に限られることから、生徒会の継続的な運動にはならなかったことに、難点があった。そのため満場一致で指導部に生徒の考えを示しても、「その場の雰囲気に流されただけ」とされ相手にされなかった。

「ジャンパー問題」について、昨年、生徒会が全校生徒を対象にして行ったアンケート結果を見ると、着てきたいという人が51％、その中には、「自転車に乗る時コートは邪魔で危ない」とか生徒指導部とは反対の意見もある。着てきたくないという人は7％、どちらでもよいという人が4％となっているが、その他は無回答という関心の無さも見られ、今後の特別委員会の、リーダーとしての器量もためされるところだ。



今年は進展がみられるだろうか

---

## 秋林くんが初優勝

### 将棋　全国大会は天童で

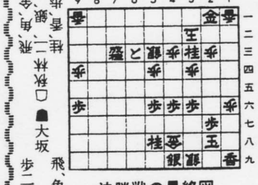
七月一日、秋田魁新報社会議室で行われた秋田県高校将棋大会に出場した本校四人の選手のうち、二Fの秋林康範君は、個人戦で初優勝を飾った。

この大会の個人戦には三十八人が参加、予選リーグを経て決勝トーナメントを行った。決勝に残った相手は大曲高校の二年生大坂昌幸君で、大坂君は昨年の優勝者。ダークホースといわれた秋林君は好調の波に乗り相手の飛車を取って落ちついて指し、初優勝を果たした。

本校の囲碁将棋部は人数不足のため団体戦へは出場できなかったが、秋林君の活躍に大喜びしている。

秋林君は、八月九日から天童市で開かれる全国大会へ出場するが、「一戦一戦頑張る」と抱負を述べている。顧問の川村喜将先生は「この機会に知的ゲームである囲碁将棋の部を再生させてほしい」と話しておられた。

秋林康範君



決勝戦の最終図

---

## 真剣に耳傾ける

### 秋田大学説明会

昨二十日、秋田大学説明会が行われた。説明が行われたのは教育学部と鉱山学部で、三年生の希望者が対象となった。

教育学部の小松元也教授と、鉱山学部の成田裕一教授が来校されたが、大学でどのような学習や研究が行われ、どのような資格・免許がとれるか、そして卒業後の進路などについて話された。

小松教授は英語の学び方なども話され、生徒は真剣に耳を傾けた。

---

## 内容を大幅に刷新

### 進路指導資料

毎年受験生たちが情報を知るために心強い味方として利用してきた「進路指導資料」が、内容をよりグレードアップして完成した。

たとえば、卒業生の在学中の成績や模試の結果のデータを大幅に増やし、一人の受験生のデータを三年まで追って行って自分のデータと比べることができるように、「偏差値比較グラフ」をつけた。

また、大学、就職の受験体験が率直に語られている合格体験記は知っている先輩の、実感のこもった言葉だけに、注目されている。

この他にも、いままであまりくわしく知らされていなかった公務員模試の成績や、先輩たちが合格を達成するまでのたくさんの情報を満載している。

編集にあたった小林勝平先生にうかがうと、「特に今回の目玉商品の合格体験記は、父母、生徒を問わず一度は必ず読んでみてほしい」とのことだった。

---

## 渡部(均)先生イギリスへ

理科の渡部均先生（一年C組担任）は、九月二十七日から二カ月間にわたって、イギリスに渡ることになった。

これは文部省の若手教員海外派遣実施計画によるもので、若手教員に国際的視野に立った識見と教職への自覚と誇りを高めさせ、教育の国際化を推進するという計画に、一県から小中高一人ずつの研修員に選ばれたものである。

出発を前に渡部先生は、「百聞は一見にしかずというので、この機会に、積極的に向こうの生活や学校教育を見てきたい。日本とイギリスの教育を比較しながら、日本の教育の何がすばらしいのか、あちらの学校や家庭の何を学びとるべきなのか、よく勉強してきたい」と話しておられた。

---

## 三角点

### 言論の自由の実行

▼七月九日、秋田市の護国神社が中核派を名乗る過激ゲリラに放火された。秋田県に大嘗祭に使う悠紀田が設けられることに対する抗議行動だそうだ。社殿は全焼してしまい、その後県内の各神社は見回りなどで警戒体制を一層強化しているという。▼昨年十二月、長崎市の本島市長が銃撃されるという事件があった。幸いにも市長の命に別状はなかった。しかし、それより前には朝日新聞社阪神支局での銃撃事件があり若い記者が凶弾に倒れている。▼これらすべてに共通するものは自分と違った考えや意見の持ち主に対し、正々堂々言論をもって反論し挑むのではなく、過激な暴力に訴えて相手をねじふせ、だまらせようとする姿勢である。個人の思想や精神、そして言論の自由は民主主義の中で最も尊重されなければならない。▼各自がどのような思想を持とうが一向に差しつかえないが、考えの違う者に自分の思想を無理におしつけ、従わなければ暴力で圧するということは許せることではない。このような時こそ言論でペンが剣より強いことを実証しなくてはならない。▼とはいいながら、これは難しいことである。本当に我々は言論の自由がいかにすばらしいことかを心に刻んでいるだろうか。これがたてまえだけで受け取られているからこの種の事件が起きるのではないだろうか。▼教室の授業の中で、部活動や友達との関係の中で、あるいは生徒総会やホームルーム活動の場で、我々は本当に、話し合うことの大切さを実感し、それを実行しているだろうか。確かに暴力行為などという非常識なことはない。しかし、自分の考えをまとめ、語り、それを互いに突き合わせて高めていくという練習をし、それを楽しむようになることが、真の「言論の自由」の尊重ではないかと思う。